

ジャン=マリイ・フェアポールテン著

ミーマーンサー文献

金 沢 篤

ここに紹介するのは、ベルギーのジャン=マリイ・フェアポールテン (Jean-Marie Verpoorten) 氏の近著『ミーマーンサー文献』(*Mīmāṃsā Literature: ML*)である。著者 Verpoorten 氏は、これまで、『アイタレーヤ・ブラーフマナにおける語順』(*L'ordre des mots dans l'Aitareya-brāhmaṇa*, Paris, 1977) の他、英語ないし仏語によるヴェーダ及びミーマーンサーに関する論文や書評を少なからず発表している。

本書 ML は、オランダの碩学ヤン・ホンダ (Jan Gonda) 博士の編集になる、現在分冊形式で刊行中の大部の『インド文献史』(*A History of Indian Literature: HIL*) の第四部「学術・技芸文献」(Scientific and technical literature) 部門の一分冊 (Vol. VI=Pt. 3, Fasc. 5) として、刊行されたものである。言うまでもなく、この HIL は今日でもなお第一級の参考文献として重宝されているオーストリアの碩学ヴィンテルニッツ (M. Winternitz) 博士個人による同名の著作に範をとったものである。本書は、書名からも明らか通り、所謂インド・バラモン「六派哲学」の一つであるミーマーンサー学派の文献を扱うが、「六派哲学」としては、既刊の『ニヤーヤ・ヴァイシェシカ』(B.K. Matilal, *Nyāya-Vaiśeṣika*, 1977: Vol. VI=Pt. 3, Fasc. 2), 『サーンキヤ文献』(M. Hulin, *Sāṃkhya Literature*, 1978: Vol. VI=Pt. 3, Fasc. 3) に次ぐものであり、特にミーマーンサーの研究者にとっては待望久しいものであろう。先に刊行された分冊などで、『M. Hulin による *Pūrva Mīmāṃsā and Sāṃkhya Philosophy*』や『G. Maximilien による *Pūrva Mīmāṃsā*』が順次予告されていたのであるが、それがこの度、著者に Verpoorten 氏を得てこのような形で漸く刊行を見たのである。ミーマーンサーの文献をその作者の人となりを含めて紹介し、通史的に纏めたこの種の研究は、これまでも再三発表されてきたと言い得るが、そのいずれもがかなり時代を経たものとなり、また学問的精度の点でもいささか心許無く感じられる昨今、それらに代わるものとして、最新の研究成果までを取り込んでの参考書が待たれていたというわけであ

る。だが、ミーマーンサーという、膨大なヴェーダ文献を背景にした祭事学派というその特殊性にもよるのであろう。限られた紙面で、しかも一人の学者がそれを遺漏なくカバーするのは至難の業である。従って誰にとっても満足のいくものは、望むべくもないとも言えるが、度重なる担当執筆者の変更等は、そうした事情を反映しているようである。以下に、本書の内容に即して、簡単にやや組織立てて紹介し、少しく感想などを書き連ねてみたい。

本書は著者自身の「前書」(Preface) (p. V), 「目次」(Contents) (pp. VII-VIII), 「略語表」(List of Abbreviations) (p. IX), 本文 (pp. 1-54), 及び巻末の「文献集」(Bibliography: Bibl.) (pp. 55-61), 「索引」(Index) (pp. 63-71) よりなる100頁にも満たない小著である。54頁の本文は、全体が67の小セクションに分けられており、そのほとんどには簡潔な見出し語が付けられている。それらのセクションは、通史的観点を明確に示す判りやすい標題の付された幾つかの章に配当されており、さらに Contents には67の各セクションを内容によってやや細かく包摂するような、適当な標語が記されている。本書を通読すれば、ミーマーンサー研究の初心者は、かなり信頼のおけるミーマーンサー通史の概要と研究の現況とを把握出来るであろう。また敢えて通読を望まぬ読者は、この Contents や巻末の Index によって、目的の箇所のみを参照することも出来るというものである。さらに、Bibl. は、手頃な「ミーマーンサー文献案内」となるであろう。本文は以下のように構成されている。

序文 (Introduction)	p. 1
	(ss. 1-2)
第一章：ミーマーンサー前史	p. 3
	(ss. 3-6)
第二章：ミーマーンサーの創始者たち：ジャイミニとシャバラ	p. 5
ジャイミニと『ミーマーンサー・スートラ』	(ss. 7-8)
『サンカルシャ(ナ)・カーング』	(s. 9)
シャバラに先行する学匠たち	(ss. 10-11)
シャバラと『シャーバラ・パーシャ』	(ss. 12-27)
第三章：ミーマーンサーの黄金時代	p. 22
バルトリミトラとヴィンドヤヴァーシン	(s. 28)
クマーリラとその著作	(ss. 29-40)
プラバーカラとその著作	(ss. 41-46)

マンダナとその著作	(ss. 47-49)		
第四章：副注釈者たちの時代		p. 38	
ウンペーカ等	(s. 50)		東
シャーリカナータとその著作	(ss. 51-53)		洋
他学派の著作におけるミーマーンサー	(s. 54)		学
パールタサーラテイ	(ss. 55-56)		報
その他のミーマーンサーの学匠〔I〕	(ss. 57-58)		
マーダヴァ	(s. 59)		
その他のミーマーンサーの学匠〔II〕	(s. 60)		
ラウガークシ・バースカラとアーパデーヴァ	(s. 61)		
ナーラーヤナ	(s. 62)		
ミーマーンサーとグルマシャーストラ	(s. 63)		
ミーマーンサーとナヴィヤ・ニヤーヤ	(s. 64)		
20世紀のミーマーンサー	(s. 65)		
結論 (Conclusion)		p. 52	
	(s. 66)		
図表 (Chart)		p. 54	
	(s. 67)		

著者はその Preface の冒頭で ‘This publication is a modest attempt to collect the data concerning the *Mīmāṃsā* from books and papers published over half a century, and to give an up-to-date summary of them.’ と明記している。既にかなり充実した研究史を持つ謂わば ‘old matter’ と見なし得るミーマーンサーの担当者の言としてはごく妥当なものであろうが、同時に、HIL の編者たる Gonda 博士の ‘old matter had to be brought up to date and a wealth of fresh information to be included.’⁽⁵⁾ との言に忠実に応えたものとなっている。

ミーマーンサーに関わる学匠たちの人物・著作・思想を、ほぼその生存年代順に簡潔に記すに当たり、著者は、学匠たちの生存年代を具体的に示し、その著作については主として註記中に刊本を指示する。また、その思想の概説に際しては、時に原典の英訳を交えて、読者の理解の便に供している。学匠の各々に割かれる紙面にはかなりの偏りが見られるが、一応ミーマーンサーの教理史上に占める重要さに応じたものであり、概ね妥当と言えよう。また、自らが叙述に当たって依拠した研究も概ねその当該箇所を、註記中に示している。時にかなり立ち入った議論に踏み込むこともあるが、それとても通読の妨げになるものではない。

著者によって、今世紀のミーマーンサーの学者として、特に G. Jhā, P. V. Kane, Kevalānandasaraswatī の三人が取り上げられ、簡単にその人物・業績が紹介されている (s. 65) ことも、むしろ喜ぶべきであろう。Jhā はジャイミニ (Jaimini)、シャバラ (Śabara)、クマーリラ (Kumārila)、プラバーカラ (Prabhākara)、マンダナ (Maṇḍana) というミーマーンサーの教理史上最重要な学匠たちの著作の英訳やテキストを刊行し、原典に基づく最もスタンダードな研究書 *Pūrva-Mīmāṃsā in its Sources* の著者である。また Kane は、ミーマーンサーと関わりの深い、ダルマシャストラの歴史を詳細に記した大著 *History of Dharma Śāstra* の著者である。また、前二者には知名度の点でかなり劣るとはいえ、Kevalānanda は、ある意味ではミーマーンサーの原典研究では最重要なものと言い得る七巻からなる *Mīmāṃsākośa* (MK) の編纂者である。少し先走って言うならば、著者 Verpoorten 氏の本書における最大の功績とは、もしかしたらこの Kevalānanda とその MK に照明を当てた点にあるとまで言い得るのである。各地に保管されている写本を必ずしも自由に活用し得ず、また刊行されている各種テキストも容易に入手できずに苛立っている現代の多くの研究者にとって、著者は、本書によっても、貴重な数々のサンスクリット原典の全体ないし部分を含むその MK の有用性と使用法を示してくれたように思われるからである。著者は、それらミーマーンサー研究史上に屹立する三学者の研究などを遠ざけることなく、また、近年相次いで発表された研究書や重要な論文の成果までを取り込んで、本書を文字通り up-to-date な参考書に仕立て上げた、と先ずは言えそうである。だが、HIL の既刊の他の分冊同様、極めて洗練された体裁を持つ本書ではあるが、「批判としての学問」の実践者にとっては、むしろ相当に杜撰な書物と単刀直入に言うべきかも知れない。そのアカデミックな意匠と本書の性格からして世界各地にかなり多くの読者を獲得する筈と想像される本書だから、敢えて言うのである。

インド思想史上重要なミーマーンサー学派の根本經典であるという点からだけでも繰り返し論及されるべきものと言える『ミーマーンサー・スートラ』(*Mīmāṃsā-sūtra*: MS) の、全スートラ数を、著者は2745と明記している (s. 8)。他の箇所でも 'there are some discrepancies in the numbering of the *adh.* and *sūtras* ...' (s. 13) と記しているのであるから、それが如何なるテキストないし研究によるものであるかの註記は、絶対不可欠であろう。だが、著者はそれをしていない。例えば、既に定評のある英訳付き MS のテキストである M. L. Sandal 本には、2621スートラと明記され、また A.

B. Keith は、テキストを明示した上で、その数を2652 (ないし別版では2742) としているのである。だが、本書の著者がMKを愛用しており、またMK, Vol. 3冒頭の‘An exhaustive list of the *adh.* ...’に言及している (n. 45) 事実を知るならば、それはMKによるものと推定出来るかもしれない。「ミーマーンサー百科」の体裁を取るMKには、「論題」(adhikaraṇa : adh.)名は、漏れなくその見出し語として立てられており、その項目下の本文には該当するMSとそれに対する諸注釈の主要部(全部ないし部分)が収録されているのである。従って現在流布するSandal本などとは別に、少なくともMSに関して、KevalānandaによるMK本もあるわけで、諸注釈を校合した結果のKevalānandaの研究成果としてあるそれが、著者の注目するところとなったのである。上記のリストは飽く迄もadh.に関してのものであり、それ自体極めて有用なものであるが、それぞれのadh.に所属するストラ数は確認し得てもストラ自体に関しては、MKの各項目にあたらなければならない。著者は労を惜しまず、そのリストに基づいて正確に足し算をやりおおせた結果、上記の、おそらくこれまで著者以外の研究者によっては一度も報告されたことのなかった(?)2745というストラ数を確信を持って記したのに違いない。だが、MK本による限り、この数字は無意味なのである。そのリスト中の七つのadh.のストラ数を表わす数字は誤植と考えられる。筆者の計算が正しいとすれば、2745ではなく、2749とするのが適当であろう。このことはMKの本文に当たって見れば容易に確認される⁽⁷⁾筈であるにも拘らず、著者は長年その労を惜しんできた⁽⁸⁾のである。

また、著者は、伝記的資料の乏しいMSの作者と考えられるJaiminiに関する奇妙な伝承がPañcatantra 2,34にあると明記する (s. 7)。そのセクションの見出しに付された註記 (n. 14) にはD. V. GargeとU. Mishraの研究の当該箇所⁽⁹⁾の指示がある。それを見ると、前者には2.34、後者にはII 36とあり、共に依拠したPañcatantraの刊本についての指示がない。筆者の手許の底本が明示された二種の和訳によれば、2.33と2.28にそのエピソードがある。果たしてこれが著者にとってのup-to-dateの意味なのだろうか。

著者は、‘Recall too that the followers of Pr(=Prabhākara: 筆者) themselves have given their master the names of *Jaratprabhākara* “Old Prabhākara” and *Guru* with a depreciating shade.¹⁶⁵’ (s. 41: cf. Index) と記している。jaratprabhākaraなる語の用例に接したこともなく、またここに記されている事態を想像したことすらなかった筆者は、新しい知見が得られたとも考えなかったが、著者がその註記 (n. 165) 中に掲げている典

拠となる三研究の当該箇所を読んでみて、やや愕然としたのである。著者が記すようなことは、どこにも書いてはなかったのである。孰れも「古いプラーバーカラ派」(Jaratrābhākara)となっており、「新しいプラーバーカラ派」(Navyaprābhākara)との対比を明確に記したのもあった。それとも、これを単なる誤植と考えるべきだろうか。

さらに、著者は‘the sentence is merely the sum of the meanings of its components [=words of the sentence: 筆者],’ (s. 35) という奇妙な文を記している。これは、the meaning of a sentence is ... の誤記と好意的に解すべきか。なおその一行前には、‘*anvitārthānvayavāda*’ (Index も同様) なる珍妙な術語も見られる。これは、明らかに *anvitārthābhīdhānavāda* の誤りであろう。

さらに、著者は Maṇḍana (MM) のミーマーンサーの著作を、*Bhāvanāviveka* (BV), *Vidhiviveka* (VV), *Mīmāṃsānukramaṇikā* (MA), *Sphoṣasiddhi* (SS) とした上で、その概説を与えている (s. 48) が、今は特に SS の取り扱いを問わないとしても、BV, VV, SS をそれぞれ、‘a collection of 60 *kārikās* with a gloss by MM himself’, ‘40 *kārikās* with auto-commentary’, ‘37 *kārikās* with a *vṛtti* by MM himself’ と説明している。筆者の知る限り、いまだかつて、これらの作品に対してこのような説明がなされたことはない。著者にはそう考える根拠が存するのかもしれないが、もしかしたら著者は、韻文と散文よりなる、インドにあってかなり普通に見られる一つの作品形式を、全て「自註 (sva-vṛtti) 付きの詩作品」と考えているのかもしれない。

また著者は、本書が扱うミーマーンサー文献の数ある「文」のうち最重要と言い得る一文をも、正確に記していない。即ち MS 1, 1, 1 (athāto dharmajijñāsā) を何と ‘*athātaḥ dharmajijñāsā*’ (s. 54: cf. s. 10) と記しているのである。これは、誤植として言い逃れることは出来まい。

また著者は、‘it [=Mīmāṃsā: 筆者] explores the way of (ritual) action (as distinct from the way of knowledge) towards “Liberation” (*mokṣa*).’ (s. 1) と記すが、「ミーマーンサーは解脱 (*mokṣa*) を目指しての祭式行為の方途の探求である」などという説明は、いったい何を根拠として導き出されるのであろうか。歴史を全く顧慮しない非今日的記述としか思えない。

著者は MS 等に言及される Jaimini に先立つ(?)学匠 Aitiśāyana を Atiśāyana (s. 5) と綴っている (Index も同様)。また、Kumārila の失われた著作 *Bṛhatṭikā* を常に *Bṛhatṭikā* (s. 38, etc.), *Nyāyaratnamālā* に対する注釈書 *Nāyakarātna* を *Nayakarātna* (s. 58, Index: cf. n. 221),

Kamalākara の *Tantravārttika* (TV) に対する注釈書 *Bhāvārtha* を *Bhāvārtha* (s. 60, Index), Anantadeva (正確には Anantadeva II?) の *Bhāṭṭālamkāra* を *Bhāṭṭālamkāra* (s. 60, Index) と綴っている。また, E. Frauwallner の重要な独語の論文名を ‘Bhāvanā and〔→ und〕 Vidhi bei Maṇḍanamīśra’ (Bibl.), 謎の多い *Saṅkarsakāṇḍa* に関する R. W. Lari-iviere のものを ‘Madhyamīmāṃsā〔→ Madhyamamīmāṃsā〕 ...’ (Bibl.), G. Jhā の名著名を ‘Prabhākara〔→ Prābhākara〕 School ...’ (Bibl.), Bhavanātha の *Nayaviveka* を *Nāyakaviveka* (Bibl.) とし, 一冊完結の G. V. Devasthali の著書を引くに当たって, 何と, ‘vol. I’ (Bibl.) と付記している。

これらの他にも, この手の本としては異例のことに, 誤記・誤植が夥しくあるが, 語頭の大文字・小文字の使用, イタリック体の使用, 略号使用の手続き等の表記上の不首尾, さらに参考書としての不備も甚しく, 編者 Gonda 博士の当初のプランが, ‘it “is intended to be both accessible to the layman and useful for scholars initiating original research”⁽¹¹⁾’ に沿うものであるとすれば, このような形で本書が世に出てしまったことの責任は, 一人 Verpoorten 氏だけのものではあるまい。何時か巻毎に合冊されて再度刊行される暁には, 相当の挺入れが必要となろう。

筆者に許された紙面では, 著者の理解とその概説の内容の妥当性を論うことは望むべくもなかったのであるが, その内容の詮議を一切抜きにしても, 本書が如何に期待外れの著作であるかが判っていただけたらとうと考える。したがって, 先述した通り, これまで必ずしも充分に活用されてきたとは言えない MK の宣伝こそが本書の功績, との感想に落ち着くのである。だがそれに加うるに, 筆者はミーマーンサー研究の辺境と言うべき日本にあって, 細々とその研究に従事する者の一人として, これまで未刊であった TV の重要な注釈書 *Ajita* が本邦の TV 研究の第一人者たる針貝邦生博士によって現在刊行されつつあること⁽¹³⁾を, 本書がはっきり紹介していることを, とまかくも素直に喜びたいと思う。この針貝博士の企ては, 既に逸早く原實博士の報告されたことではあるが, 本書によってさらにより多くの学者の知るところとなり, それを活用してミーマーンサー文献中屈指の難物である TV が解明され, さらにその後の展開のプロセスなどが明確に跡づけられることを祈念して, 本稿の結びとしたい。(1988.1.21)

(Jean-Marie Verpoorten, *Mīmāṃsā Literature* [A History of Indian Literature, ed. by Jan Gonda, Vol. VI, Fasc. 5], Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1987, x, 71p.)

註

- (1) 著者の略歴・業績については、IJ 30 (1987), p. 79を参照。なお著者について、針貝邦生、松本照敬、湯山明、一島正真各先生に御教示を賜わった。記して謝意を表したい。
- (2) HILは1987年までに30冊が刊行されているが、その全容(既刊・近刊)については、Otto Harrassowitzのカタログ〔*Orientalistik (Sprachwissenschaft, Religionswissenschaft) 1987*, pp. 64-67〕などを参照されたい。
- (3) 著者未参照の、V. A. Ramaswami Sastri, "A Short history of the Pūrva Mīmāṃsā Śāstra", *Tattvabindu ... with Tattvavaibhāvanā ...*, AnUSS 3, 1936, Introduction, pp. 1-149は看過し得ない。
- (4) 本書のBibl.から漏れているが、祭事学派としてのミーマーンサーの概要を知る上で極めて有用であり、またミーマーンサーの原典研究の模範的なものとしても重要である前田専学・倉田治夫「インド祭事学派の諸問題」〔I〕-〔II〕, 『鈴木学術財団研究年報』12/13 (昭50/51) 77-100頁; 『仏教学』4 (昭52) (1)-(85)頁も忘れられない。本書では、一点を除き、日本語による研究は全て無視されている。
- (5) J. Gonda, *Vedic Literature* (HIL, Vol. I, Fasc. 1), Wiesbaden, 1975, 《Editor's Introduction to the History》, p. 4, ll. 18-19.
- (6) 著者は本書に先立つミーマーンサーに関する諸論文でも、屢々MKを用いている。
- (7) MS単独のテキスト・ストラ索引・単語索引を含むという点からも、MKを補完する重要な著作と考えられるKevalānandasaraswatī, ed., *Mīmāṃsādarśanam : Jaiminimīmāṃsāsūtrapāṭhaḥ*, Wai, 1948 (MD)についても、著者は全く触れていない。その冒頭部5頁にわたってある、MSの諸注釈書に基づくadh.数とストラ数の一覧表によっても2749のストラ数が確認される。L. RenouによるMD, MKに対する書評〔JA, 238 (1950), pp. 438-439 & ABORI, 34 (1953), pp. 178-179〕は、MD, MKの格好の紹介文となっており、是非参照されたい。
- (8) 本書Bibl.中のVerpoorten 1981a, p. 391; 1984, p. 519でも2745というストラ数が註記なしで明記されている。
- (9) 著者が指摘する三研究中、特にA. S. Sastri 1961, *Bhūmikā*, p. 24を参照されたい。そこにはjaratprabhākaraという語も見い出されるが、著者がその文脈を正しく理解しているとは考えられない。

- (10) 著者により明記される学匠たちの生存年代の典拠がほとんど示されていないこと、Bibl. 中に掲げられる諸文献の初出年がほとんど示されていないこと、の二点だけを、今はその不備として指摘しておきたい。
- (11) Review of J. Gonda 1975, by J.W. de Jong, IJ 20 (1978), p. 305, ll. 22-23.
- (12) 本書に先立つ HIL, Vol. VI, Fasc. 1-3 までは、そのままの合冊を意図してか、通し頁が付されているが、Fasc. 4 (D. Pingree, *Jyotiḥśāstra*, Wiesbaden, 1981) よりは、分冊毎に独立の頁付がなされている。
- (13) K. Harikai, "AJITĀ, A Commentary on the Tantravārttika" (1)-(6), 『佐賀医科大学一般教育紀要』1 (昭58), 1-30頁；同2 (昭59), 1-30頁；同3 (昭60), 1-36頁；同4 (昭61), 1-44頁；同5 (昭62), 1-38頁；同6 (昭62), 17-62頁。
- (14) Cf. M. Hara, *Studies on Indian Philosophy and Literature in Japan, 1973-1983* [Asian Studies in Japan, 1973-1983, Part II-21], Tokyo, 1985, pp. 8, 25.